

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

15 乳ぬすつとの出現

第十五日め（三月三十日）

快晴。午後から風つよし。

午前七時半。朝の母子とり作業。子ヒツジ二匹に母二頭。いつもどおりの子おとりの要領で、群れ本隊から石垣へレム内の母子群分隊へ移行。群れ本隊は北へ移動。

午前八時。ヒツジもヤギも母子ともども石垣のなかの大広場にだされる。朝の哺乳タイム。この作業は通称「モームーレフ」。モームはおっぱいという意味だから、まさに「おっぱいあげよ」のお時間。石垣の暗室から大広場へだされると、母畜はざわつき、子の行動が触発され、いっせいに「おっぱい」の時間になる。

そのとき、問題のある子畜には人が哺乳を介添する。問題のある子畜がいらないにこしたことはない。ところが、大きな問題をかかえた子ヒツジがいる。二匹の母なし子ヒツジ。モージ母が嫁のセルゲレンにぐちる。

「もうモームさせる母畜がいらない。どれでもいいからつかまえろ」

セルゲレンは、さきほど母子群分隊に移行してきたヒツジをおいかけてわしづかみにした。どうしてそのヒツジにしたのか。ほかのヒツジではだめなのか。

「これは、うちのだわ。だいたい乳が多いわ。知ってる。つかまえるの、かんたん」

わたしの会話能力にあわせた、単純明快なる説明をうける。

まだあと四日。あらかじめ設定された出産開始まであと四日。未成熟段階での出産や双子出産では、最良の乳母にはならない。適当な乳母がみつからず、哺乳作戦は難航する。しかし、哺乳作業そのものはずいぶん楽になっている。みよ、あの子ヒツジたちを。

セルゲレンがヒツジをつかまえると、たちどころにあの子ヒツジたちが突進してくる。もうちゃんと理解している。自分たちのために、静止する母メスがいることを。血のつながらない自分たちを、こづいたり、足蹴りしない母メスがいることを。そればかりではない。子ヒツジたちは、こっそり「ぬすみ飲み」さえしている。おとなしい母畜が実子に授乳しているとき、かれらはしのびよって、もうひとつの乳首をものにする。

きょう出産組に移籍したメスヒツジは、乳母としてフルに活用された。母なし子ヒツジたちのほかに、乳不足の状態にあった子ヒツジ二匹に授乳させられた。そのときもまた、母なし子ヒツジたちはやってきた。自分たちのために静止させられているわけではないのに。かえって、ほかの哺乳介添にじやまになるほど、子ヒツジたちは乳ぬすつととなって群れのなかをはしる。

この乳ぬすつとたちは、母をなくしてきょうでちょうど十日目。哺乳びんは最初の三日間利用したにとどまる。そのあとは、適当な乳母ではないとしながらも、ずっとヒツジやヤギに授乳させてきた。哺乳びんの利用は意外にも少なかった。しかも、三日のうちほとんど一日といていいほどである。最初の一日、乳母にするにも出産したものがなかった日だけ、哺乳びんに依存した。出産がみられたとたん、乳母をしたてた。乳母ヤギの乳が不十分なために翌日も、少々哺乳びんにたよったにすぎない。

乳母をつかまえて哺乳を介添するという「乳母方式」と、牛乳をオグジするという「哺乳びん方式」と、いったいどちらが作業として簡単なのだろうか。哺乳びん方式の場合は、ウシを搾乳する手間がかかる。ただし、搾乳はしよせん人の食用のために実施する作業であるから、それほど特別な手間がふえるわけではない。作業の厄介さかげんは、どちらもおなじ程度ではないだろうか。哺乳びんの使用機会が少ないのは、作業の手間の程度とはかわりなく、人びとが積極的に哺乳びん方式よりも乳母方式をえらんだ結果であると思われる。

もし、哺乳びんで育てれば、子ヒツジたちは人なつっこいヒツジになったであろう。人の命令をよくきくヒツジを育てることもできたかもしれない。しかし、人びとが家畜の世話をしている目的は、人になつくペツトを育てることではない。人に従順な家畜をしたてることでもない。人につきしたがうのではなく、群れにつきしたがう行動様式をもたなければ、遊牧的家畜とはいえない。

乳母方式は、哺乳びん方式よりもずっと自然な形態であろう。人類がウシを搾乳する以前なら、当然乳母をえらぶしかなかったのだから。また、人につきしたがう子ではなく、群れにつきしたがう行動様式をとれるようになっていたのだから。静止されているメスにみずから走りより、静止しているメスからこっそり乳をぬすむようになった子ヒツジは、人につきしたがうよりも家畜そのものにつくことを教えられたように思われる。乳母を多用して哺乳を介添したために、乳ぬすつたになってしまっているが、それは結局、群れのなかにとけこむ行動様式なのではないだろうか。そもそも、それが普通の子たちの行動様式である。哺乳びん方式をできるだけ避けて乳母方式にしたからこそ、より自然な行動様式を育てたことになるのではないか。いまはかりそめの乳母しかないが、やがて養母をえるときがくるだろう。そのときも、母につきしたがうという行動様式は有利となろう。哺乳びんをやめてなるべく乳母をしたてるといふ戦略。それは、ヒツジたちの行動様式を「群れづけ」するものではないだろうか。



乳をぬすみ飲もうとして近づく子ヒツジ

午後六時半、夕方の哺乳タイムがはじまる。宿营地付近を放牧に出でいた母子群が石垣のなかにもどつてきている。大広場にいる。母が授乳して、子が哺乳している。ヒツジの場合、一日中母と子と一緒にいた。子ヒツジたちは、乳を飲みたいときに飲める状況にあった。しかし実際のところ、のべつまくなしに乳を飲んでゐるわけではない。日中の放牧時には、一度だけ人が群れをまとめる。散開した状態から、群れをまとめるのである。このとき自然に哺乳タイムとなる。ただし、介添はまったくおこなわない。放牧をおえて石垣のなかに誘導すると、また自然に哺乳タイムがはじまり、夕方の哺乳タイムとなる。このときもまた、乳ぬすつとの活躍ぶりが見られた。

朝と夕の二度の哺乳タイムのあいだに、さまざまな作業がおこなわれた。分家の兄夫婦がトラクターにのつて西方へ出かけた。乾燥したウシの糞「アルガル」をひろいあつめるために。本家の弟夫婦は、荷車をひいて南方に出かけた。大きな去勢ウシで車をひいて、水をくむために。家に水が到着したとき、去勢ウシは車をひっかけた。桶が車から落ちた。桶の底がわれた。水はすっかりこぼれた。大地に吸われるように消えた。桶を修理して再出発。二度めに到着したとき、桶にはもうほとんど水がのこっていなかった。もう一度修理しなおして再再出発。一日に三度も水をくみにいくなんで。きょうは、ウニナ一の厄日。

夜もふけたころ、戸外にひづめの音がした。いまじぶんだだろう。人の足音は、東のゲルに消える。ウジチャのところにやってきたのはバートル。きょう一日のウマの群れの様子を報告にくる。バートルは仕事熱心だ。ウマ名人から十分知識を吸収して、みずから名人になろうとしている気持ちがよくわかる。バートルとウジチャとの話をきいて、わたしはようやく理解できた。なぜ馬群を分割することに問題があるのかを。ウマのたてがみ切りの後日談である。

それは予想されていたトラブルだった。馬群の生態的構成を無視して、所有権のあるウマを群れから分割したことによって、トラブルが発生した。さまざまな理由から、新しい馬人バータルに群れの管理を委託しなかった馬主は二人。かれらはそれぞれ自分たちのウマたちを群れからひきはなした。種オスウマと何頭かのメスウマと、そしてその子ウマたちがひきぬかれて小さな群れをつくらされた。そのグループは一見したところ、種オス一頭を中心とするワン・マイル・ユニットに見える。しかし、実際にはユニットとしてのまとまりがない。メスウマたちにとってみれば、いままでつきしたがってきた種オスではないのだし、また種オスウマにとっても、これまでしたがえてきたメスウマたちではないからである。

ウマのたてがみを切った翌日、つまりきのう、もとの馬群からひきはなされた一頭の種オスウマが、所有者の群れから逃走。これまでしたがえていたメスウマたちのところへもどってしまった。つまり、もとの馬群にかえった。これを無理やりつれかえてさらに翌日、つまりきょう。これまでとは別のメスウマたちと一緒にさせられた種オスウマは、すっかり機嫌をそこねたらしい。人が南へ追うと、ウマは北へはしる。そんなウマにくだんの所有者は歯ぎしりした。かれがちよっと一服してお茶を飲んでいるあいだに、こんどはすべてのウマがもとの馬群のいるものところへかえってしまった。

「だからいったら、むずかしいって」

と哄笑するウルジーチンゲル。いったいどうするつもりなのだろうか。

「自分で馬群を放牧するのをあきらめるかもしれないな。そしたら、やっぱりバータルにあずけるだろうって。すると、バータルには有利さ。なぜって、頼んでひきうけてもらうことになるんだからね。わたしはひきうけていたときはウマ一頭につき一ヶ月で一元。バータルはもっと高い値を要求できる。自分で放牧するといつて、あきらめたらね」

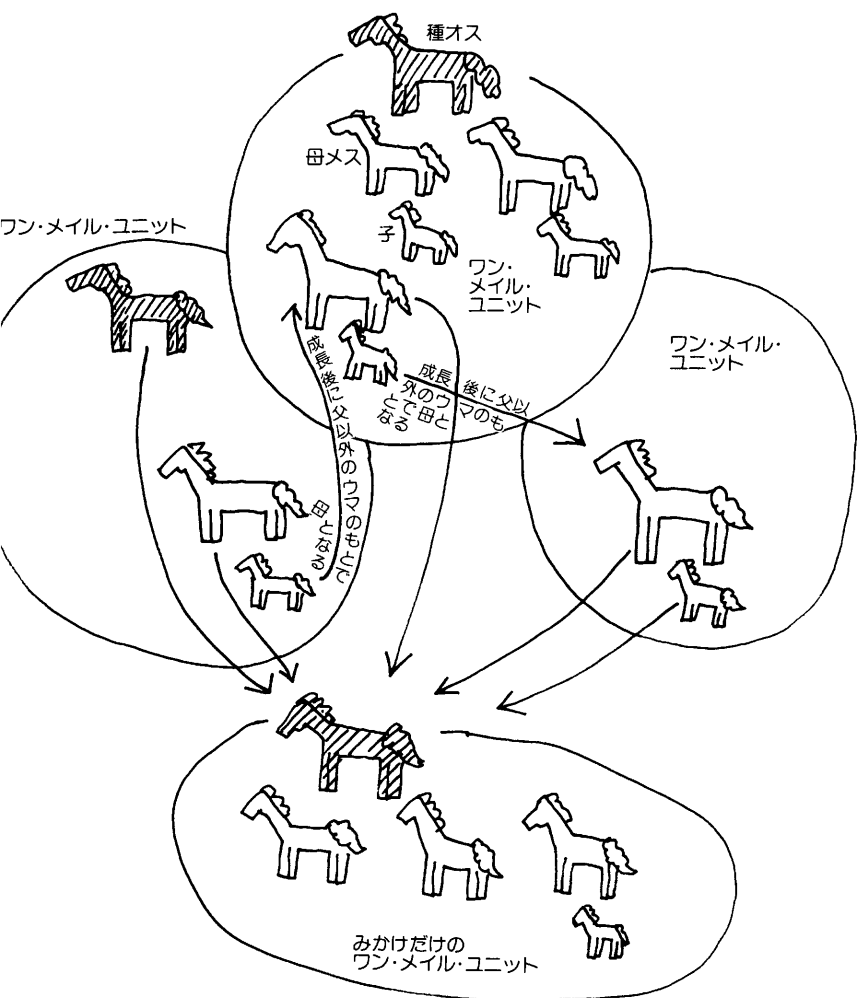


図9: 馬群の所有的構成と生態的構成の模式図

結局、くだんの人は翌日バートルに種オスウマを売却したいともうしでることになる。自分の所有する種オスウマであるとはいふものの、もとの馬群から容易にひきはなせるものではないことをよくよく了解したのである。もとの馬群の所有者たちに種オスウマを売却し、かわりにあらたな種オスウマを自分の群れのために購入する計画である。馬群をもとのように統合する意思はないらしい。自己の所有する馬群をあくまでもみずから放牧するつもりなのだ。ここにももう一人、あらたに馬人になろうという挑戦者がいた。

ことのついでにもう一件。馬群を分割したもう一人のこと。ウジチャは、気になってその馬主を訪問する。たてがみ切りから三日目後のこと。

「馬群は安定していますか？」

とたずねると

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

そういつて馬主は町へかけてしまう。しかし、その翌日、ウマたちは一頭のこらず、もとの馬群と一緒にになった。なれしたしんだ群れのいる、なれしたしんだ牧地にもどってきていたのである。このゆゆしき一大事を、その馬主が知るまでには時間がかかる。いったん町へたら、しばらくはかえってこないだろうから。